

曙覧の歌

正岡子規

青空文庫

余の初め歌を論ずる、ある人余に勧めて俊頼集、文雄集、曙
としより
ふみお
あ
 覧集けみを見よという。それかくいうは三家の集が尋常歌集に異なる
 ところあるをもつてなり。まず源俊頼の『散木弃歌集』みなもとのを見て
さんぼくきかしゆう
 失望す。いくらかの珍しき語を用いたるほかに何の珍しきことも
 あらぬなり。次に井上文雄の『調鶴集』ちようかくを見てまた失望す。
 これも物語などにありて普通の歌に用いざる語を用いたるほかに
 何の珍しきこともあらぬなり。最後に橘曙覧の『志濃夫廼舎歌集』たちばなの
しのぶのや
 を見て始めてその尋常の歌集に非ざるを知る。その歌、『古今』
 『新古今』の陳套ちんとうに墮おちらず真淵まぶち、景樹かげきの窠かきゆう白かきゆうに陥おらず、『万
 葉』を学んで『万葉』を脱し、鎖事さじ俗事を捕え来りて縦横きたに馳ちく駆く

するとところ、かえつて高雅蒼老そうろうさ些の俗氣を帯びず。ことにその
題目が風月の虚飾を貴ばずして、ただちに自己の胸臆きようおくを攄し
くもの、もつて識見高邁こうまい、凡俗に超越するところあるを見るに足
る。しこうして世人は俊頼と文雄を知りて、曙覧の名だにこれを
知らざるなり。

曙覧の事蹟及び性行に關しては未だいまこれを聞くを得ず。歌集に
あるところをもつてこれを推すに、福井辺の人、広く古学を修め、
つとに勤王の志を抱く。松平春岳まつだいらしゆんがく挙げて和歌の師とす、推
奨最つとむ。しかれども赤貧洗うがごとく常に陋屋ろうおくの中に住ん
で世と容れず。古書堆裏独破凡こしよたいひとはきに凭りて古を稽え道たのしを樂む。詠歌
のごときはもとよりその専攻せしところに非ざるべきも、胸中の

不平は他に漏らすの方なく、凝りて三十一字となりて現れしもの
 なるべく、その歌が塵氣を脱して世に媚びざるはこれがためなり。
 彼自ら詠じて曰く

吾歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく声する夜の窓

灯火のもとに夜な夜な来たれ鬼我ひめ歌の限りきかせ

む

人臭き人に聞する歌ならず鬼の夜ふけて来ばつげもせむ
 凡人の耳にはいらじ天地のこころを妙に洩らすわが

うた

何らの不平ぞ。何らの気焰ぞ。彼はこの歌に題して「戯れに」
 といいしといえども「戯れ」の戯れに非るはこれを読む者誰かこ

れを知らざらん。しかるをなお強いて「戯れに」と題せざるべからざるもの、その裏面には実に万斛ばんこくの涕てい涙るいを湛たたうるを見るなり。ああ吁あこの不遇の人、不遇の歌。

彼と春岳との関係と彼が生活の大体とは『春岳自記じき』の文つまびらかに詳なり。その文に曰く

橘曙覽の家いたる詞

おのれにまさりて物しれる人は高いき賤やしきを選あばず常あに逢あ見て事尋ねとひ、あるは物語を聞きまほしくおもふを、けふは此頃このにはめづらしく日影あたたかに久堅ひさかたの空晴渡りてのどかなれば、山川野辺のけしきよなかるべしと巳みの鼓つづみうつ頃よりのあそび野遊のあそびに出たりき、三橋といふ所にいたる、中根師質なかねもろただあれ

こそ曙覧の家なれといへるを聞て、にわか俄にとはむとおもひなりぬ、ちひさき板屋の浅ましげにてかこひもしめたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや塵ひぢ山をなせり、柴の門もなくおぼつかなくも家にいりぬ、師質心せきたるさまして参議君おなりの御成ぞと大声にいへるに驚きて、うちよりししじもの膝折ひざふせながらはひいでぬ、●

すこし広き所に入りてみれば壁落おちかかり障子はやぶれ畳はきれ雨もるばかりなれども、机ちふみやおに千文八百ふみうづたかくのせて人ひとまろ丸みぞうの御像などもあやしき厨子ずしに入りてあり、おのれきものぬぎかへて賤しずが著きるつづりおりに似たる衣をきかへたり、この此時扇いちあく一握なからいたもつを半井保なからいたもつにたまひて曙覧にたびてよと仰せ

たり、おのれいへらく、みましの屋の名をわらやといへるは
ふさはしからず、橘のえにしあれば忍ぶの屋とけふよりあら
ためよといへり、屋のきたなきことたとへむにものなし、し
らみてふ虫などもはひぬべくおもふばかりなり、●
かたちはかく貧まぢしくみゆれど其心そののみやびこそいといとしたは
しけれ、おのれは富貴の身にして大厦たいか高堂に居て何ひとつた
らざることなけれど、むねに万巻のたくはへなく心は寒く貧
くして曙覧におとる事更に言をまたねば、おのづからうしろ
めたくて顔あからむ心地せられぬ、今より曙覧の歌のみなら
で其心そののみやびをもしたひ学まなばばや、さらば常の心の汚よごたるを
洗ほかひ浮世の外の月花を友とせむにつきつきしかるべしかし、

かくいふは参議正四位上大蔵大輔源朝臣慶永元治二年衣おおくらたゆう あそんよしなが
更著末さらぎのむゆか、館に帰りてしるす

曙覧が清貧に処して独り安んずるの様、はた春岳が高貴の身をもつてよく士に下るの様はこの文を見てよく知るを得ん。この知己あり。曙覧地下めいに瞑すべきなり。

〔『日本』明治三十二年三月二十二日〕

曙覧が清貧の境涯はほぼこの文に見えたるも、彼の衣食住の有様、すなわち生活の程度いかんはその歌によつて一層詳つまびらかに知るところを得べし。その歌左に

人にかさかしたりけるに久しうかへさざりければ、

わらはしてとりによりけるにもたせやりたる

山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもたぬなりけり

その貧乏さ加減、我らにも覚えのあることなり。

ひた土むしろに筵むしろしきて、つねに机おすゑおくちひさき伏ふ
 屋せやのうちに、竹生おいでて長うのびたりけるをその
 ままにしおきて

壁くぐる竹に肩する窓のうちみじろくたびにかれもえだ
 振る

膝おいるるばかりもあらぬ草屋を竹にとられて身をすぼめ
 をり

明治に生れたる我らはかくまで貧しくなられ得べくもあらず。

（「草屋」を「草の屋」と読ませ「草花」を「草の花」と読まする例、集中に少からず。漢語にはあらず）

錢乏しかりける時

米の泉なほたらずけり歌をよみ文をつくりて売りありけども

彼が米代を儲け出す方法はこの歌によりてやや推すべし。（「泉」は「ぜに」と読むべし）

ある日、多田氏の平生窟より人おこせ、おのが庵の壁の頹れかかれるをつくろはす来つる男のこまめやかなる者にて、このわたりはさておけよかめ

りとおのがいふところどころをもゆるしなう、机
 もなにもうばひとりてこなたかなたへうつしやる、
 おのれは盗人の入たらん夜のこちしてうろたへ
 つつ、かたへなるところに身をちひさくなくてこ
 のの子のありさま見をる、我ながらをかしさね
 んじあへて

あるじをもここにかしこに追たてて壁ぬるをのこ屋中塗
 りめぐる

家の狭さと、あるじの無頓着むとんちやくさはこの言葉書ことばがきの中にあら
 われて、その人その光景目前に見るがごとし。

おのがすみかあまたたび所うつりかへけれど、い

づこもいづこも家に井なきところのみ、妻して水
汲みはこぼする事もかきかぞふれば二十年あまり
の年をぞへにきける、あはれ今はめもやうやう老おい
にたれば、いつまでかかくてあらすべきとて、貧
き中にもおもひわづらはるるあまり、からうじて
井ほらせけるにいときよき水あふれ出いづ、さくも
てくみとらるべきばかりおほうあるぞいとうれし
き、いつばかりなりけむ□「しほならであさなゆ
ふなに汲む水もからき世なりとぬらす袖そでかな」と、
そぞろごとひひけることのありしか、今はこのぬ
れける袖もたちまちかわきぬべう思はるれば、こ

の新しき井の号を袖干井とつけて

濡しこし妹が袖干の井の水の涌出るばかりうれしかり

ける

家に婢僕なく、最合井遠くして、雪の朝、雨の夕の小言は我ら

も聞き馴れたり。

「独楽唼」と題せる歌五十余首あり。歌としては秀逸ならねど

彼の性質、生活、嗜好などを知るには最便ある歌なり。その中に

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚烹て児等皆がうましうましといひて

食ふ時

など貧苦の様を詠みたるもあり。

文人の貧ひんに処おるは普通のことにして、彼らがいくばくか誇張的にその貧を文字に綴つづるもまた普通のことなり。しこうしてその文字の中には胸裏わだかまに蟠わだかまる不平の反応として厭えんせい世的または嘲ちようぞく俗的の語句を見るもまた普通のことなり。これ貧に安んずる者に非ずして貧に悶もたゆる者。曙覽はたして貧に悶ゆる者か否か。再びこれをその歌詠に徴せん。「『日本』明治三十二年三月二十三日」

余は思う、曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、貧曙覽が安心の度は一般貧文人の安心よりも更に堅固なりと。けだし彼に不平なきあちぎに非あるもその不平は国体の上における大不平にして衣食住に関する小不平に非ず。自己を保護せずしてかえって自己

を棄てたる俗世俗人に対してすら、彼は時に一、二の罵詈ばりを加うることなきにしもあらねど、多くはこれを一笑に付し去りて必ずしも争わざるがごとし。「独楽噺」の中に

たのしみは木芽このめにや瀾して大きなる 饅頭まんじゅうを一つほほばり
しとき

たのしみはつねに好める焼豆腐うまくに烹たてて食くわせける
とき

たのしみは小豆あずきの飯ひえの冷たるを茶漬づけてふ物になしてくふ
時

多言するを須もちいず、これらの歌が曙覧ならざる人の口より出いで得べきか否かを考えみよ。陽に清貧たのしをたのし楽しんで陰に不平を蓄うるか

の似^え而非^せ文人が「独楽噺」という題目の下にはたして饅頭、焼豆腐の味を思い出だすべきか。彼らは酒の池、肉の林と歌わずんば必ずや麦の飯、藜^{あかぎ}の羹^{あつもの}と歌わん。饅頭、焼豆腐を取ってわざわざこれを三十一文字に綴^{つづ}る者、曙覧の安心ありて始めてこれあるべし。あら面白いの饅頭、焼豆腐や。

安心の人に誇張あるべからず、平和の詩に虚飾あるべからず。余は更に進んで曙覧に一点の誇張、虚飾なきことを証せん。似^え而非^せ文人は曰く、黄金^{ひやくまんびん}百万緡は門前のくろ（犬）の糞のごとしと。曙覧は曰く

たのしみは銭なくなりてわびをるに人の来^{きた}りて銭くれし

時

たのしみは物をかかせて善き価値惜みげもなく人のくれし

時

曙覧は欺かざるなり。彼は金を糞の如しとは言わず、あどけなくも彼は金を貰もらいし時のうれしさを歌い出だせり。なお正直にも彼は金を多く貰いし時の思いがけなきうれしさをも白状せり。仙人のごとき仏のごとき子供のごとき神のごとき曙覧は余は理想界においてこれを見る、現実界の人間としてほとんど承認するあたわず。彼の心や無垢清浄、彼の歌や玲瓏透徹。

貧、かくのごとし、高、かくのごとし。一たびこれに接して畏敬の念を生じたる春岳しゅんがくはこれを聘へいせんとして侍臣じしんをして命めいを伝えしめしも曙覧は辞して応ぜざりき。文を売りて米の乏しきを

歎なげき、意外の報酬を得て思わず打ち笑みたる彼は、ここに至つて
 名利を見ること門前のくろの糞のごとくなりき。臨むに諸侯の威
 をもつてし招くに春岳の才をもつてし、しこうして一曙覽をして
 破屋ちくしゆん竹けんそん筭ごうまんの間より起たたしむるあたわざりしもの何がゆえぞ。
 謙遜けんそんか、傲慢ごうまんか、はた彼の国体論は妄みだりに仕うるを欲せざりし
 か。いずれにもせよ彼は依然として饅頭焼豆腐の境涯を離れざり
 しなり。慶応三年の夏、始めて秩ちつろく禄を受くるの人となりしもわ
 ずかに二年を経て明治二年の秋（？）彼は神の国に登りぬ。曙覽
 が古典を究め学問に耽ふけりしことは別に説くを要せず。貧苦の中に
 ありて「机ちふみやに千文八百文堆おぶみく載みせ」たりという一事はこれを証し
 て余りあるべし。その敬神尊そんのう王の主義を現したる歌の中に

高山彦九郎正之

大御門おおみかどそのかたむきて橋上に頂根突うなねつきけむ真心まごころたふと

をりにふれてよみつづけける(録一)

吹風ふくかぜの目にこそ見えぬ神々は此このあめつち天地にかむづまりま

す

独楽噺(録二)

たのしみは戎夷えみしよろこぶ世の中に皇国みくに忘れぬ人を見ると

き

たのしみは鈴屋大人すずのやうしの後に生れその御諭みさとしをうくる思ふ

時

赤心報国せきしんもてくにむくゆ
(録一)

国汚す奴やつこあらばと太刀拔ぬきて仇あだにもあらぬ壁かべに物ものいふ

ひとにしめす

示人（録一）

天皇すめらぎは神かみにしますぞ天皇ちよくの勅ちよくとしいはばかしこみまつ
れ

極めて安心あんしんに極めて平和へいなる曙あけぼのも一たび国体こくたいの上に想おもい届る
時は満腔まんこうの熱血ねつけつを灑そそぎて敬神けいじんの歌うたを作り不平ふへいの吟ぎんをなす。慷こうが
慨がい淋りん漓り、筆ふで、劍けんのごとし。また平日へいじつの貧曙あせに非あず。彼かれがわず
かに王政おうせい維新いしんの盛典せきでんに逢あうを得えたるはいかばかりうれしかりけむ。

慶応四年春、浪華なみぎはらに

行幸ぎやうこうあるに吾わが

宰さい相しやう君きみ御供仕おんともしたまへる御おんとも仕つかうまつりに、

こつづきかげみつぬし
上月景光主のめされてはるばるのぼりけるう

まのはなむけに

天皇の御さきつかへてたづがねののどかにすらん難波津
に行ゆけ

すめらぎの稀まれの行いで幸御供する君のさきはひ我もよろこ
ぶ

天使のはろばろ下りたまへりける、あやしきしは
ぶるひ人ひとどもあつまりゐる中にうちまじりつつ御
けしきをかみ見まつる

隠士も市の大路に匍はらばい匍はらばいならびをろがみ奉まつる雲の上人

天皇の大御使おおみつかいと聞くからにはるかにはるかにをがむ膝をり伏せ

て

勅使をさえかしこがりて匍匐はらばいおろがむ彼をして、一たび二重橋下に鳳輦ほうれんを拝するを得せしめざりしは返すがえすも遺憾いかんのことなり。

都にのぼりて

大行たいこう天皇の御はふりの御わぎはてにけるまたの

日、泉涌せんにゆうじ寺もうでに詣たりけるに、きのふの御わぎの

なごりなべて仏さまに物したまへる御ありさまに

うち見奉られけるを畏かしこれどうれはしく思ひまつ

りて

ゆゆしくも仏の道にひき入るる大御車おおみくるまのうしや世の中

曙覧は王政維新の名を聞きて、その実を見るに及ばざりしなり。

〔『日本』明治三十二年三月二十四日〕

社会の一貧民としての曙覧、日本国民の一人としての曙覧は、臆測ながらにほぼこれを尽せり。ここより歌人としての曙覧につきて少しく評するところあらんとす。

曙覧の歌は比較的は何集の歌に最も似たりやと問わば、我れも人も一齊に『万葉』に似たりと答えん。彼が『古今』、『新古今』を学ばずして『万葉』を学びたる卓見はわが第一に賞揚せんとするところなり。彼が『万葉』を学んで比較的善くこれを模し得たる伎倆ぎりょうはわが第二に賞揚せんとするところなり。そもそも歌の

腐敗は『古今集』に始まり足利時代に至つてその極点に達したるを、真淵まぶちら一派古学を闢ひらき『万葉』を解きようやく一縷いちるの生命を繋つなぎ得たり。されど真淵一派は『万葉』を解きて『万葉』を解かず、口には『万葉』をたたえながらおのが歌は『古今』以下の俗調を学ぶがごときトンチンカンを演出して笑わらいを後世に貽のこしたるのみ。『万葉』が遥はるかに他集たぐいに抽ぬきんでたるは論を待たず。その抽んでたる所以ゆえんは、他集の歌が豪ごうも作者の感情を現し得ざるに反し、『万葉』の歌は善くこれを現したるにあり。他集が感情を現し得ざるは感情をありのままに写さざるがためにして、『万葉』がこれを現し得たるはこれをありのままに写したるがためなり。曙覽の歌に曰く

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすから
むもの

「いつはりのたくみ」『古今集』以下皆これなり。「誠」の一字は曙覧の本領にして、やがて『万葉』の本領なり。『万葉』の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂うところの「ありのままに写す」とはすなわち「誠」にほかならず。後世の歌人といえども、誠を詠め、ありのままを写せ、と空論はすれどその作るところのかえつていつわりのたくみを脱するあたわざるは誠、ありのまま、の意義を誤解せるによる。西行のごときは幾多の新材料を容れたるところあるいはこの意義を解する者に似たれど、實際その歌を見れば百中の九十九は皆いつわりのたくみなるを知らん。趣

味を自然に求め、手段を写実に取りし歌、前に『万葉』あり、後に曙覧あるのみ。

されば曙覧が歌の材料として取り来るものは多く自己周囲の活かつじんじかつふうこうにして、題を設けて詠みし腐れ花、腐れ月に非ず。こは『志濃夫廼舎歌集』を見る者のまず感ずるところなるべし。

彼は自己の貧苦を詠めり、彼は自己の主義を詠めり。亡き親を想いては、「親ある人もあるに」と詠み、亡き子を想いては、「きたもとのふ袂たもとにすぎりし子の」と詠めり。行幸の供にまかる人を送りては、「聞くだに嬉うれし」と詠み、雪の頃旅立つ人を送りては、「用心してなだれに逢あふな」と詠めり。楽たのしみては「楽し」と詠み、腹立てては「腹立たし」と詠み、鳥啼なけば「鳥啼く」と詠み、蝻いなご飛ひ

べば「蝨飛ぶ」と詠む。これ尋常のことのごとくなれど曙覽以外の歌人には全くなきことなり。面白からぬに「面白し」と詠み、香もなきに「香に匂ふにお」と詠み、恋しくもなきに「恋にあこがれ」と詠み、●

見もせぬに遠き名所を詠み、しこうして自然の美のおのが鼻の尖さきにぶらさがりたるをも知らぬ貫つらゆき之以下の歌よみが、何百年の間、数限りもなくはびこりたる中に、突然として曙覽の出でたるはむしろ不思議の感なきに非ず。彼は何に縁よりてここに悟るところありしか。彼が見しこと聞きしこと時に触れ物に触れて、残さず余さずこれを歌にしたるは、杜甫とほが自己の経歴つまびらかを詳に詩に作りたると相似あいたり。古人が杜詩を詩史と称えし例ならに倣ならわば曙覽の歌

を歌史ともいふべきか。余が歌集によりてその人の事蹟じせきと性行とを知り得たるもその歌史たるがためなり。しかれども彼が杜詩より得たるか否かは知るに由よしなし。ただ杜甫の経歴の變化多く波瀾はらん多きに反して、曙覽の事蹟ははなはだ平和にはなはだ狭きようあい隘いに、時は逢いがたき維新の前後にありながら、幾多の人事的好題目をその詩囊しのう中に収め得ざりしこと実に千古の遺憾いかんなりとす。

〔『日本』明治三十二年三月二十六日〕

『古今集』以後今日に至るまでの撰集、家集を見るに、いずれも四季の歌は集中の最要部分を占めて、少くも三分の一、多きは四分の三を占むるものさえあり。これに反して四季の歌少く、雑ぞうの

歌いぢるしの著いぢるしく多きを『万葉集』及び『曙覧集』とす。この二集の他に秀でたる所以ゆえんなり。けだし四季の歌は多く題詠にして雑の歌は多く實際より出いづ。『古今集』以後の歌集に四季の歌多きは題詠の行われたるがためにして世下るに従い恋の歌も全く題詠となり、雑の歌も十分の九は題詠となりおわりぬ。曙覧の歌すら四季のには題詠とおぼしきがあり、かつ善からぬが多し。題詠必ずしも悪あしとに非ず、写実必ずしも善しとに非ず。されど今日までの歌界の実際を見るに題詠に善き歌少くして写実に俗なる歌少し。曙覧が實地に写したる歌の中に飛驒ひだの鉾山を詠めるがときはことに珍しきものなり。

日の光いたらぬ山の洞ほらのうちほらに火ともし入いりてかね掘ほり出いだ

す

赤まはだか裸おのこの男子あらがねむれゐて鉞まろがりのまるがりつち砕くふり鎚うちうち揮ふりて

さからうすひづるや碓まろがりたててきらきらとひかる塊こつきて粉こにする

かけひ

笕かけひかけとる谷水むらがにうち浸しゆれば白露ふきとろ手にこぼれくる

黒むらがけぶり群ふきとろりたたせ手もすまに吹おつ鑠おつかせばなだれ落おつる

かね

とろ

鑠とろくれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀はしの玉

しろがね

銀しろがねの玉をあまたに筥はこに収いれ荷緒にのおかためて馬馳はしらす

しろがねの荷負おえる馬ひきを牽ひきたてて御貢みつぎつかふる御世みよのみさ

かえ

採鉞しさい溶鉞しさいより運搬いに至るまでの光景み仔細みに写いし出いして目観みるが

ごとし。ただに題目の新奇なるのみならず、その叙述の巧たくみなる、
実に『万葉』以後の手際なり。かの魚彦なひこがいたずらに『万葉』の
語句を模して『万葉』の精神を失えるに比すれば、曙覧が語句を
摸もせずしてかえつて『万葉』の精神を伝えたる伎倆は同日に語る
べきにあらず。さわれ曙覧は徹頭徹尾『万葉』を擬せんと務めた
るに非ず。むしろその思うままを詠みたるがおのずか自ら『万葉』に近づ
きたるなり。しこうして彼の歌の『万葉』に似ざるところははた
して『万葉』に優るところなりや否や、こは最大切なる問題なり。
余は断定を下していわん、曙覧の歌想は『万葉』より進みたる
ところあり、曙覧の歌調は『万葉』に及ばざるところありと。ま
ず歌想につきて論ぜん。「『日本』明治三十二年三月二十八日」

歌想到主観的なるものと客観的なるものとあり。『万葉』は主として主観的歌想を述べたるものにして客観的歌想は極めて少かりしが、『古今』以後、客観的歌想の歌、次第にその数を増加するの傾向を見る。

主観的歌想の中にて理屈めきたるはその品卑しく趣味薄くして取るに足らず。『古今』以後の歌には理屈めきたるが多けれど

『万葉集』、『曙覧集』にはなし。理屈ならぬ主観的歌想は多く実地より出でたるものにして、古人も今人もさまで感情の変るべきにあらぬに、まして短歌のごとく短くして、複雑なる主観的歌想を現すあたわず、ただ簡単なる想をのみ主とするものは、観察の精細ならざりし古代も観察の精細に赴きし後世も差異はなはだ

少きがごとし。ただ時代時代の風俗政治等々しからざるがために材料または題目の上には多少の差異なきにあらず。例えば万葉時代には実地より出でたる恋歌の著しく多きに引きかえ『曙覧集』には恋歌は全くなくして、親を懐おもい子を悼み時を歎なげくの歌などがかえつて多きがごとし。

曙覧の歌、四よつになる女の子を失いて

きのふまで吾衣わがころも手にとりすがり父よ父よといひてしものを

父の十七年忌に

今も世にいまされざらむよはひにもあらざるものをあはれ親なし

髪しろくなりても親のある人もおほかるものをわれは親
なし

母の三十七年忌に

はふ児にてわかれまつりし身のうさはおも面だに母を知らぬ
なりけり

古書を読みて

真まおしか男鹿の肩うら焼く占うらにうらとひて事あきらめし神代をぞ思

ふ

筑つくしびと紫人のその国へかえるに

程すぎて帰らぬ君と夕ゆうけ占とひまつらむ妹ゆきにとく行て逢へ

されど女を思うも子を思うも恋い思うとばかり詠む短歌にては、

感情の切なるを感ずるほかなければ、いずれにても深き差異あるにあらず。この点におきて『万葉』と曙覧と強いて優劣するを要せず。しこうして客観的歌想に至りては曙覧やや進めり。

四季の題は多く客観的にして、『古今』以後客観的歌は増加したれど、皆縁語または言語の虚飾を交えて、趣味を深くすることを解せざりしかば、絵画のごとく純客観的なるは極めて少かり。『新古今』は客観的叙述において著く進歩しいちじるしこの集の特色を成ししも、以後再び退歩して徳川時代に及ぶ。徳川時代にては俳句まづ客観的叙述において空前の進歩をなし、和歌もまたようやくに同じ傾向を現ぜり。されども歌人皆頑陋がんろう編へん狭きようにして古習を破るあたわず、古人の用い来りきたし普通の材料題目の中にてやや変

化を試みしのみ。曙覽、徳川時代の最後に出でて、始めて濶眼かつがんを開き、なるべく多くの新材料、新題目を取りて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めてこれを目もく 睫しやうに失したる真淵、景樹を驚かすべく、進取の気ありて進み得ず超ししよ 超しゆんじゆん 逡巡としてこそく 姑息に陥りたる諸平もろひら、文雄ふみおを圧するに足る。徳川時代の歌人がわずかに客観的趣味を解しながら深くその蘊うん 奥おうに入るあたわざりしは、第一に「新言語新材料を入るるべからず」という従来の規定を脱却するあたわざりしに因よる。曙覽はまずこの第一の門戸を破りて、歌界改革の一步を進めたり。

〔『日本』明治三十二年三月三十日〕

曙覧が客観的景象を詠ずるは、新材料を入れたることにおいて、新趣味を捉えしことにおいて、『万葉』より一步を進めたとともに、新言語新句法を用いしことにおいて、一般歌人よりは自在に言いこなすことを得たり。

あきのでんか
秋田家

いなごまろ

※うるさく出でとぶ秋のひよりよろこび人豆を打つ

とり
酉（詠十二時の内）

ゆうがお
夕貌の花しらじらと咲めぐる賤が伏屋に馬洗ひをり

まつのと
松戸にて口よりいづるままに（録二）

ふくろふの糊すりおけと呼ぶ声に衣ときはなち妹は夜ふ
かす

こぼれ糸さでにつくりて魚とると二郎じろう太郎たろう三郎さぶろう川に日く
らす

行路雨こうろのあめ

雨ふれば泥踏ふみなづむ 大津道おおつみち我に馬ありめさね旅人

古寺雨こじのあめ

風まじり雨ふる寺の犬ふせぎしぶきのぬれにうつるみあ
かし

寒灯

ともすれば沈灯しずむともしび火かきかきて苧おをうむ窓あられに霰あられうつ声

砂月涼さげつすずし

そとの浜ち千さとの目路めじに塵ちりをなみすずしさ広き 砂すな 上のうえ

の月

薔薇そうび

羽ならず蜂あたたかに見なさるる窓をうづめて咲くさう
びかな

題しらず

雲ならで通はぬ峰の石陰いわかげに神世のほひ吐く草くさの花はな

歌会の様よめる中に（録五）

人麻呂の御像みかたのまへに机ともしびすゑ灯みきかかげ御酒みきそなへおく

設け題よみてもてくる歌どもを神の御前にならべもてゆ
く

ことごとく歌よみいでし顔を見てやをら晩食ゆうげの折敷おしきなら

ぶる

汁食めせとすすめめぐりてとぼしたる火もきえぬべく人突つきあ

たる

戸をあけて還る人々雪しろくたまれりといひてわびわび

ぞ行ゆく

はつうまもうで
初午詣

稲荷坂見あぐる朱あけの大鳥居うごかゆり動して人のぼり来る

「設け題」 「探り題」 「あき米櫃」 「饅頭を頬ばる」 「笑ひかた

りて腹をよる」 「置かず狸のものの広さにて」 「二郎太郎三郎」

など思うに任せて新語新句をはばかり気もなく使いたるのみなら

ず、「人豆を打つ」 「涼しさ広き」 「窓をうづめてさく薔薇」な

どいうがごとく、詩または俳句には用うれど、歌にはいまだ用い
 ざる新句法をも用いたるはその見識の凡ほんならぬを見るべし。「神
 代のにほひ吐く草の花」といえる歌は彼の神明的理想を現したる
 ものにて、この種の思想が日本の歌人に乏しかりしは論を竝またず。
 （曙覽の理想も常にこの極処に触れしにあらず）一般に天然に対
 する歌人の觀察は極めて皮相的にして花は「におう」と詠み、月
 は「清し」と詠み、鳥は「啼なく」、とのみ詠むのほか、花のうつ
 くしき、月の清さ、鳥の啼く声をしみじみと身にしめて感じたる
 後に詠むということなければ、変化のなきのみか、その景象を明め
 瞭いりように眼前うかに浮うかばしむることは絶えてあるなし。曙覽の叙景法
 を見るにしからず。例えば「赤きもみぢに霜ふりて」「霜の上に

冬木の影をうす黒くうつして」と詠めるがごとき、「もみぢ」の上
 上に「赤き」という形容語を冠せ、「影」の下に「うす黒き」と
 いう形容語を添えて、ことさらに重複せしめたるは、霜の白さを
 強く現さんとの工夫なり。その成功はともかくも、その著眼
 の高きことは争うべからず。

曙覽は擬古の歌も詠み、新様の歌も詠み、慷慨激烈の歌も
 詠み、和暢平遠の歌も詠み、家屋の内をも歌に詠み、広野の
 外をも歌に詠み、高山彦九郎をも詠み、御魚屋八兵衛をも詠み、
 侠客の雪も詠み、妓院の雪も詠み、蟻も詠み、虱も詠み、書中
 の胡蝶も詠み、窓外の鬼神も詠み、饅頭も詠み、杓子も詠む。
 見るところ聞くとところ触るところごとく三十一字中に収め

ざるなし。曙覧の歌想豊富なるは単調なる『万葉』の及ぶところにあらず。

〔『日本』明治三十二年四月九日〕

世に『万葉』を模せんとする者あり、『万葉』に用いし語の外は新らしき語を用いず、『万葉』にありふれたる趣のほかは新しき趣を求めず、かくのごとくにして作り得たる陳腐なる歌を挙げ、自ら万葉調なりという、こは『万葉』の形を模して『万葉』の精神を失えるものなり。『万葉』の作者が歌を作るは用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用いて趣向を詠みたるものすなわち『万葉』なり。曙覧が新言語を用い新趣味を詠じこゝろ毫も古格旧例に拘泥せざりしは、なかなか『万葉』の

精神を得たるものにして、『古今集』以下の自ら画して小区域にきよくそく

局きよくそく 促 たりしと同日に語るべきにあらず。ただ歌全体の調子において曙覧はついに『万葉』に及ばず、実朝に劣りたり。惜おしむべき彼は完全なる歌人たるあたわざりき。

曙覧の歌の調子につきて例を挙げて論ぜんか。前に示したる鉾山の歌のごときは調子ほぼととのいたり、されどこれほどにととのいたるは集中多く見るべからず、ましてこれより勝りたるはほとんどあるなし。

しよちゆうのからこちよう
書 中 乾 胡 蝶

からになる蝶には大和魂を招きよすべきすべもあらし
し

結句字余りのところ『万葉』を学びたれど勢^{いきおい}抜けて一首を結ぶに力弱し。『万葉』の「うれむぞこれが生返るべき」などいえるに比すれば句勢に霄^{しょうじよう}壤^{じよう}の差あり。

緇^{しそつぎをみる}素月見

密^{しきみ}つみ鷹^{たか}すゑ道をかへゆけど見るは一つの野路の月影

この歌は『古今』よりも劣りたる調子なり。かくのごとき理屈の歌は「月を見る」というような尋常の句法を用いて結ぶ方よろし。「見るは月影」と有形物をもって結びたるはなかなか賤^{いや}しく厭^{いと}わし。

煙

あないぶせ銚^{さしなべ}子かけてたく藁^{わら}のもゆとはなしに煙のみ

たつ

「あないぶせ」とかように初はじめに置くこと感情の順序もとに戻りて悪し。
 『万葉』にてはかくいわず。全くこの語を廃するか、しからざれば「煙立ついぶせ」などように終りに置くべし。下二句の言い様も俗なり。

赤

賤しずがいえ家はいり 這はいり入はいりせばめて物ううる畑のめぐりのほほづきの
 色

この歌は酸漿ほおずきを主として詠みし歌なれば一、二、三、四の句皆かせい一氣呵成かせい的にもものせざるべからず。しかるにこの歌の上半は趣向も混雑しかつ「せばめて」などという曲折せる語もあり、かたが

たもつて「ほほづきの色」という結句を弱からしむ。

よそありきしつづ帰ればさびしげになりてひをけのすわりをる哉かな

句法のたるみたる様、西行の歌に似たり。「さびしげになりて」という続きも拙く「すわりをるかな」のたるみたるは論なし。

「なりて」の語をやめて代りに「火桶ひおけ」の形容詞など置くべく、

結句は「火桶すわりをる」のごとき句法を用うるか、または「○すわりをる」「すわり○○をる」のごとく結びて「哉」を除くべし。

かつふれて巖いわおの角に怒りたるおとなひすごき山の滝つせ

この歌は滝いきおいの勢を詠みたるものにて、言葉にては「怒りたる」

が主眼なり。さるを第三句に主眼を置きしゆえ結末弱くなりて振
わす。「怒り落つる滝」などと結ぶが善し。

しまぎきつちおぬし
島崎土夫主の軍人の中にあるに

妹が手にかはる甲の袖まくら寝られぬ耳に聞くや夜嵐よあらし

上三句重く下二句軽く、瓢ひさぎを倒さかしまにしたるの感あり。ことに第四
句力弱し。

こまぎみ 狛君の別墅べつしよ二楽亭

広き水真砂のつらに見る庭のながめを曳ひきて山も連なる

前の歌と同じ調子、同じ非難なり。

〔『日本』明治三十二年四月二十二日〕

酔人の水にうちいるる石つぶてかひなきわざひじに臂ひじを張る

哉

これも上三句重く下二句軽し。曙覧の歌は多くこの頭重脚とうじゆうきや軽くけいの病あり。

宰さい相しよう君のきみよりたけを賜はらせけるに

秋の香をひろげたてつる松のかさいただきまつるもろ手
ささげて

これも前の歌と同じく下二句軽くして結び得ず。

羊腸つづらおりありともしらで人のせおわに負れて秋の山ふみをし

つ

これも頭重脚軽なり。この歌にては「背に負はれ」というが主

眼なれば、この主眼を結句に置かざれば据わらざるべし。

ふくろふの糊すりおけと呼ぶ声きぬに衣きぬときはなち妹は夜ふ
かす

こぼれ糸さでにつくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くら
す

この歌はいずれも趣向の複雑したる歌なれば結句に千鈞せんきんの力
なかるべからず。しかるに二首ともに結句の力、上三句に比して
弱きを覚ゆ。ことに第四句に「二郎太郎三郎」などいえるつまり
たる語を用いなば、第五句はますます重く強きを要す。

曙覧の歌調を概論すれば第二句重く第四句軽く、結句は力弱く
して全首を結ぶに足らざるもの最も多きに居る。『万葉』にこの

頭重脚輕の病なきはもちろん、『古今』にもまたなし。徳川氏の末ようやく複雑なる趣向を取るに至りて多くは皆この病を免れず。曙覧また同じ。曙覧はほとんど歌調を解せず。歌調を解せざるがために彼はついに歌人たるを得ずして終れり。

これを要するに曙覧の歌は『万葉』に実朝に及ばざること遠しといえども、貫之つらゆき以下今日に至る幾百の歌人を圧倒し尽せり。

新言語を用い新趣向を求めたる彼の卓見は歌学史上特筆して後に伝えざるべからず。彼は歌人として実朝以後ただ一いちにん人なり。真淵、景樹、諸平、文雄輩に比すれば彼は鷄群の孤鶴こかくなり。歌人として彼を賞賛するに千言万語を費すとも過賛にはあらざるべし。しかれども彼の和歌をもつてこれを俳句に比せんか。彼はほとん

ど作家と称せらるるだけの価値をも有せざるべし。彼が新言語を用うるに先だつ百四、五十年前に芭蕉一派の俳人は、彼が用いしよりも遙かはるに多き新言語を用いたり。彼の歌想は他の歌想に比して進歩したるところありとこそいふべけれ、これを俳句の進歩に比すれば未だその門もん 墻しょうをも覗うかがい得ざるところにあり。俳人の極めて幼稚なるものといえども、趣味の多様なることは曙覧の歌のわずかに新奇ならんとせしがごときに非ず。曙覧をして俳人ならしめば、ほとんどその名だに伝うるあたわざりしなるべし。いわんや彼は全く調子を解せざるをや。しかるにかくのごとき曙覧をも古来有数の歌人として賞せざるべからざる歌界の衰退は、あわれにも氣の毒の次第と謂いわざるべからず。余は曙覧を論ずるに

方あたりて実まことにその褒ほう貶へんに迷まよえり。もしそれ曙覧の人品性行に至り
 ては磊らい々ら落らく々く世間の名利に拘束せられず、正を守り義を
 取り俯ふぎ仰よう天地に愧はじざる、けだし絶無きん僅ゆう有ゆうの人なり。

この稿を草なかする半なかにして、曙覧翁おうの令れい嗣い今いま滋し氏し特とくに草廬そうを敲たた
 いて翁の伝記及び随筆等を示さる。因よつて翁の小伝を掲げて読
 者の瀏りゆう覧らんに供せんとす。歌と伝と相照し見ば曙覧翁眼前に
 あらん。

竹の里人付記

〔『日本』明治三十二年四月二十三日〕

青空文庫情報

底本：「子規選集 第七卷 子規の短歌革新」増進会出版社

2002（平成14）年4月12日初版第1刷発行

底本の親本：「子規全集 第七卷 歌論 選歌」講談社

1975（昭和50）年7月18日第1刷発行

初出：「日本」日本新聞社

1899（明治32）年3月22日～24日

1899（明治32）年3月26日

1899（明治32）年3月28日

1899（明治32）年3月30日

1899（明治32）年4月9日

1899（明治32）年4月22日～23日

入力・kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年2月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

曙覧の歌

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>